

もくじ 疎開先の長野の寺 1P 竹塚薬王寺と安政三年の大風災 2P
鹿浜での子どもの生活⑦ 3P 生まれ変わった西新井大師の木遣塚 4P

足立史談

第563号

2015年1月15日

足立区教育委員会
足立史談編集局
足立区立郷土博物館内
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562

(25-308)



疎開先の長野の寺

上高井郡高山村高井寺
元疎開児童の制作した模型

本堂の前で体操 昭和20年10月
磯野重郎先生撮影

加の疎開が実施され、二次疎開、三次疎開まであった。
■西新井国民学校の疎開
写真の模型は西新井国民学校の疎開先であった高井寺（こうせいじ・上高井郡高山村大字高井一九七）の様子を、当時四年生であった木嶋孝行氏が思い出しながら制作した模型である。
西新井国民学校は、昭和一九年八月一日に一

次疎開に出発し、長野駅前の六つの旅館を学寮とした。一次疎開に参加したのは、空襲被害の恐れのある学校周辺の家々の建て込んだ地域の児童であった。しかし、比較的農地に囲まれた地域でも昭和二〇年四月に空襲を受けたことにより二次疎開が行われた。
■高井寺への再疎開
木嶋氏は二次疎開から合流し、長野駅前の金城館でひと月ほど過ごしたあと再疎開となった。西新井国民学校の児童は、須坂方面の寺、公会堂など五か所に分かれ、高井寺には昭和二〇年六月十五日から終戦後の十一月十一日まで滞在となった。高井寺に疎開したのは、四年生を中心に三年生、二年生の児童四三人で、男女半々であった。児童の世話をする寮母は三人で一人は足立区から来た浜野みきさんで二人は地元で採用された人だった。引率の教員は磯野重郎先生と花島栄子先生の二人で、磯野先生は他の学寮との兼任だった。児童は本堂で生活し地元の高井国民学校に通った。
町の中だった長野駅前旅館の学寮に比べ、山々を望む水田に囲まれた静かな環境で、通学路の風景も楽しかったが、次第に食料事情が厳しくなり空腹に苦しむことになった。また、旅館の学寮より部屋は広かったが、風呂は小さくて不自由で入浴は月に一度ほど、あとは、川で体を

■長野県への学童疎開 太平洋戦争中、子どもたちを空襲の被害から守ることを目的に、都市部の児童を地方へ疎開させる学童疎開が実施された。足立区の児童も、長野県へと集団疎開することとなり、昭和一九（一九四四）年八月より順次出発した。疎開先での生活は、親元を離れる寂しさはもとより、ノミやシラミ、そして食料不足が児童達を苦しめた。学童集団疎開は、三回まで行われ足立区の児童の最初の疎開（一次疎開）先は、長野駅周辺の旅館や野沢温泉の旅館、善光寺前の宿坊などが学寮となった。しかし、その後、長野市中が空襲されるようになり、さらに周辺の寺や公会堂へ移る再疎開をすることとなった。同じころ足立区内も空襲が増したことにより、追

加の疎開が実施され、二次疎開、三次疎開まであった。
■西新井国民学校の疎開
写真の模型は西新井国民学校の疎開先であった高井寺（こうせいじ・上高井郡高山村大字高井一九七）の様子を、当時四年生であった木嶋孝行氏が思い出しながら制作した模型である。
西新井国民学校は、昭和一九年八月一日に一

拭いてしのいでいたためか、ノミやシラミにも苦しめられていた。
■児童の生活を想像する 高井寺は天明五（一七八五）年福島正則の屋敷跡に移転してきた古刹で、現在も模型と同じ赤い屋根の本堂を見ることができる。模型から、児童が体操していた本堂の前、風呂場、食事を作っていた庫裏、また、境内に流れていて、食器洗いや洗濯に利用していた水路など、児童の生活の場を説明することができる。

学童疎開七〇周年特別展（足立区役所アトリウム・一月一三日から一七日）をはじめ、平和事業展など折をみて出展し、足立の疎開を語る会の方が当時の様子を説明する資料として展示される。

（郷土博物館）

足立区の廃寺余話 第3回

竹塚薬王寺と安政三年の大風災

柴田 英治

明治初期の宗教政策により足立区域では約三〇ヶ寺の寺院が廃寺となった。旧竹塚村薬王寺はそのひとつである。薬王寺の寺院処分願によれば、寺衰退のきっかけは安政三年（一八五六）の「大風災」（台風災害）で

建物が倒壊したことだという。足立区内では他に旧宮城村円満寺など四ヶ寺が、安政三年の台風被害をきっかけに廃寺となった。

安政年間といえば「安政の大獄」、「桜田門外の変」など幕末激動の時代を象徴する事件とともに、江戸に壊滅的被害を与えた「安政江戸地震」（江戸の死者約七千人以上、町方倒壊家屋一万六千軒以上）を思い浮かべる人が多いだろう。しかし、竹塚村薬王寺など五ヶ寺を全壊させたのは、安政二年（一八五五）の江戸地震ではなく翌年の台風だった。それでは「安政三年の大風災」とは一体どんな台風災害だったのだろうか？

安政三年八月二十五日（新暦九月二三日）、朝から雨模様様の江戸では、日が暮れると南東の強風が吹き出し、雷を伴いながら雨足が次第に激しくなった。夜八時頃から風雨はさらに激しさを増し、その後猛烈な暴風雨が夜半過ぎまで江戸市中を襲った。

この台風による築地本願寺御堂の崩壊、難破船激突による永代橋の切落、洋式軍艦昌平丸の田町海岸漂着などは、江戸の人々を大いに驚かせた。

台風災害の全容が未解明なこともあり、安政江戸地震に影に隠れて安政三年の台風に対する一般的な認知度は低い。しかし、この台風による死者は浜松藩内（現静岡県）から榎倉藩内（現福島県）まで確認でき

『大日本維新史料稿本』、台風は少なくとも東海東部、関東、東北部の広範囲にわたり深刻な被害を及ぼしたことがわかる。安政二年の江戸地震と比較すると、①台風被害の方がより広範囲に及んだ、②台風による建物被害は江戸東郊（安政江戸地震の震源地至近）の村々でも地震による建物被害を上回った、③台風では船舶や農作物に甚大な被害が発生したことなど経済的

図① 足立区域東部の台風被害（安政3年）

村名	総戸数	全壊	死者	暫定全壊率
伊藤谷村	55	11		20.0%
大谷田村	115	44	2	38.3%
嘉兵衛新田	75	31		41.3%
蒲原村	27	11		40.7%
北三谷村	61	39		63.9%
久右衛門新田	21	13		61.9%
久左衛門新田	64	34		53.1%
五兵衛新田	70	23		32.9%
佐野新田	28	9		32.1%
辰沼新田	15	4		26.7%
長右衛門新田	33	12		36.4%
長左衛門新田	15	5		33.3%
普賢寺村	44	27		61.4%
六ッ木村	59	9		15.3%
柳原村	37	17		45.9%
合計	719	289	2	40.2%

【備考】

①佐野新田・辰沼新田：総戸数～『人別増減書上帳（控）』（安政3年3月）、全壊（戸数）～『漬家書上帳』（安政3年8月）

②その他：総戸数～『東京府志料』（明治7年）、全壊（戸数）～『殿居茶話』（嘉永2年序）



『殿居茶話』 台風被害の取り調べ調査 酒田市立光丘文庫所蔵

損失に関しては、安政三年の台風災害が安政二年の地震災害を上回る可能性も考えられる。

安政三年の台風は足立区域にも深刻な被害をもたらした。勝山準四郎氏による『潰家書上帳』（佐野家文書）の紹介で、早くから佐野新田などでの台風被害が知られてきた。また『殿居茶話』（庄内藩士の松枝壮太右衛門編著）には葛西筋（鷹場編成上の地域呼称、江戸東郊の約二二〇町村で構成）における台風被害の取調書面が収載され、足立区域東部（二五ヶ村）の被災状況を知ることができ

る。同書によれば一五ヶ村の被害合計は死者二名、倒壊家屋二八九軒で、全壊率は実に約四〇％に及ぶ（図①参照）。

この取調書面は原本ではないが、その内容から流出元は鳥見（鷹場監督役人）関係筋と思われる、被害数値も現存する各地の潰家書上帳類（計八ヶ村）と概ね一致している。同資料によれば安政三年の台風被害は、葛西筋全体で死者・行方不明一三八名、全壊・流失戸数三、七四五軒を数える。建物被害は葛西筋全体に及んでいるが、人的被害は内陸部（八條領―現八潮市他）より、沿岸部（西葛西領新田―行徳領―現江東区―市川市他）に集中しており人的被害の主因は高波・高潮だったとみられる。足立区域における葛西筋以外の被

害詳細は不明だが、竹塚村、梅田村千住宿などで多数の家が損壊したとの記事（『大風水入場所明細書之写』他）が見られ、竹塚村も東部同様の被災状況だったと考えられる。安政三年の台風で全壊した薬王寺はその後本堂再建を果たせず、約二〇年後の明治八年（一八七五）延命寺（竹の塚五二二六）に合併されて正式に廃寺となった。

【主要参考文献】『潰家書上帳 足立郡佐野新田 辰沼新田』（足立区立郷土博物館所蔵）／『殿居茶話』（酒田市立光丘文庫所蔵）／『廃合寺院処分願』（東京都公文書館所蔵）／『大風水入場所明細書之写』（国立国会図書館所蔵）／『大日本維新史料稿本』（東京大学史料編纂所蔵）／『東京市役所編『東京市史稿 変災篇2』／『安政風聞集』（荒川秀俊編『近世気象災害志』所収）／勝山準四郎「つぶれ家書上帳」『足立史談』一五・一六）／北原糸子「台風襲来―安政三年秋の江戸」『FRONT』二〇〇四年三月号別冊）／宮澤清治他編『台風気象災害全史』／拙稿「明治期史料から探る足立区内の廃寺跡について」『足立史談』五三七）【成果物の利用】国文学研究資料館電子資料館／東京大学史料編纂所維新史料網要データベース【レファレンス協力】

東京都立中央図書館

―つづく―（渚江の歴史研究会）

廃寺ファイル③ 一葉王寺

山号：医王山
宗派：新義真言宗
合寺年：明治8年（1875）10月
（竹の塚延命寺に合寺）
本寺／寺格：総持寺／門徒
境内地：竹塚村字村附北 805
本尊：薬師如来

縁故疎開ですこした北鹿浜町の想い出②

鹿浜での子どもの生活 7

小川 誠一郎

■暮れの餅つき 正月を迎える準備が始まった。明日は待ちにまった餅つき、蔵の裏手でほこりをかぶっていた木の臼がきれいに水を打たれ、見違えるようになって土間に鎮座している。戦後になって、叔父が収穫した米を一斗升で慎重に測り俵を仕上げ、リヤカーで供出する様子を見送りながら、たった一俵だけなの？と意外に思ったことがある。近郊農家の水稻栽培は自給自足の自家用米が主で、赤飯や餅つきに必要な糯米（もちこめ）も作り、時に集落内で融通し合うことがあった。

まだ暗い朝の五時、ざわめく空気に目を覚ますと、炊事場やかまどに

電気がついて煌々と輝いている。大釜の湯がたぎって湿った熱気が伝わって来るようだ。温かな布団から離れがたくしばらく眺めていると、サラシにくるんだもち米をせいろ（蒸籠）で蒸し始めた。積み上げたせいりから湯気が勢いよく立ち上る。空が白む頃、餅つきの助人が到着する。昭和一九年の暮れ、餅つきの当日は朝から空襲があった。長男が誕生したばかりの栄さんが助人で駆けつけてくれたが、行き帰りの道すがら米戦闘機の機影に脅かされたと言っていた。

蒸し上ったもち米を手早く臼に移し、長細い杵を持った三、四名の男女が臼を囲む。先ず蒸し米を杵でこね、つき頃になったところで威勢の良い回しづきがはじまる。ペタンペタン呼吸を合わせ軽快なリズムに乗ってついてゆく。湯玉にまじって餅の小粒が周りに飛び散り顔に当たる。八分通りつき上がったところで主人の出番、臼のそばに主婦（こねどり）がついて、適宜に手水して餅をこね返しながらか、大きな杵をもって十数回でつき上げる。熱いモチをのし板に放り投げ、ここからは祖母の独壇場だ。先ず大きなモチをちぎり分けて、仏壇に供える鏡餅の大きい小さいのをいくつかこしらえる。あとはつき上がる度に米粉を振りかけ、のし棒で押し伸ばしての

し餅にする。できたての餅が積み重ねられて行く。子供の手伝いは、祖母の指図に従い、伸ばすそばから米粉をまんべんなく振りかけること、だんだん所作にも慣れてきた。キビの入ったきび餅もつくられた。キビの粒がまばらに残る薄黄色の餅は白いのし板の上でひときわ映えた。一区切りついたところで、できたてのモチで雑煮がはじまる。実家では餅と雑煮だし汁とを合わせて煮るので、餅が半ばとろけて箸使いが下手な子供は難儀する。満足な醤油が入手困難な当時、味付けは味噌が主、ヤツガシラやイモが入っている。あとは白菜の漬物だ。楽しみにしていたあんころ餅は、アズキがあっても砂糖なしではつくれない。正に絵に描いた餅！昔話に思いをはせるしかなかつた。きな粉をまぶした餅をほおばると、やさしい淡い甘味がありがたく感じられた。

大戸を締め、空襲の緊張に包まれた中での餅つきは幸い無事に終わった。

■切り分け 蔵にしつらえられた板の間に藁むしるを敷き、のし餅は数日寝かされる。固くなって包丁の入れ頃になると、皆で一斉に切り餅(角餅)づくりが始まる。大人に交じって大胆にも大きな包丁を手に、自分のできる範囲で手伝った。包丁が餅につかまり動きが取れなくなると、

無理をせず途中であきらめ大人の手を借りた。子供が刃物を使うなんて、あぶないからだめ！そんな注意も飛んで来ない。半ば無関心のままに置かれ、働き手の一員として認めてくれる空気がうれしかった。さらに日がたち硬くなった餅は、短冊状のカキモチや一センチ角のアラレに切り分けて行ったが、切り方に工夫が利き一層楽しかった。あかぎれと霜焼けで腫れた指を切りそこなうこともなく、大人達と一緒に同じような仕事が出来た満足感は格別だった。

切り餅は正月三が日から食べ始めたが、焼き餅と雑煮、それにアラレやカキモチも焼いた。食用油がないので揚げ餅はできなかった。

■餅の保存 切り餅の半分以上は水もちとして水を張った樽の中に蓄えられた。外気に放置した餅は硬くひび割れ、しばらくすると表面には、白、黄、赤、青、黒など色とりどりのカビが出てきた。カビを切出しで削り取っては焼いて食べた。石のように硬くなった鏡餅をゲンノウで叩きわり、砕いた塊を火鉢で上手く焼くと内部がせんべいのようにになった。水もちはカビないので長持ちするけど、表面がずるずるして焼くのも難しく、モチの乾いたうまみがなくなり、もっぱら雑煮や雑炊になった。

「つづく」(慶応大学名誉教授)

江戸消防記念会加入三〇周年
生まれ変わった
西新井大師の木遣塚

鈴木志乃

西新井大師の境内には、第十一区江戸消防記念会の方々によって、昭和五〇(一九七五)年に建立された「木遣塚」(きやりづか)があります。

江戸消防記念会は、江戸の町火消しの伝統技術を後世に伝える目的で、昭和十四(一九三九)年に結成された団体で、足立区は昭和五十九年に「第十一区」として加入しました。第十一区は足立区を六つの地区に分けた一番組く六番組で組織され、現

在も新春の出初式や千住の秋祭りなどで積極的に活動が行われています。平成二十六年は、記念会加入三〇周年にあたり、これを記念して、木遣塚の玉垣が新築され、去る十一月十四日にお披露目会が行われました。午前十一時、西新井大師の僧侶による法要の後、揃いの印半纏をまとった第十一区の皆さんが、木遣塚を寿ぐ木遣唄「木遣田歌」を奉納しました。

同敷地内には、木遣塚の他にも、「常夜灯」(昭和五十九年建立)や加入時の会員九六名の名前が刻まれた「江戸消防記念会入会記念碑」(同年建立)もあり、足立区の町火消しの歴史をたどることが出来ます。

(郷土博物館専門員)



木遣田歌を唄う第十一区の方々
「木遣塚 今日の除幕を 寿ぎて 目出度唄う 北の聲人」
(木遣師 稲垣悦三翁作詞)